

2019. 8. 22

畑 啓之

大正初期の地図を眺めてみると、播磨地方にも文明開化の音がする

加古郡誌（大正3年）と印南郡誌（大正5年）の巻頭にある地図を見てみると、2つの地図に大きな違いがあることが分かる。

加古郡誌の地図には加古川の流れが記されている。加古川の下流域であるが、架かる橋は加古川の町にある加古川大橋のみであり他の場所では渡し舟で対岸に渡るようになっている。地図の一番上の国包（くにかね）にも渡し船のマークが入っている。

これが、2年後の印南郡誌の地図では、加古川線の線路が現れ、国包には鉄橋ができ、加古川を渡っている。今の加古川線、当時の播州鉄道の開業である。この鉄道の開業により、加古川舟運（高瀬舟による物流）は絶えることになる。時代の変化である。

加古川線（Wikipedia）

播州鉄道・播丹鉄道

1913年（大正2年）

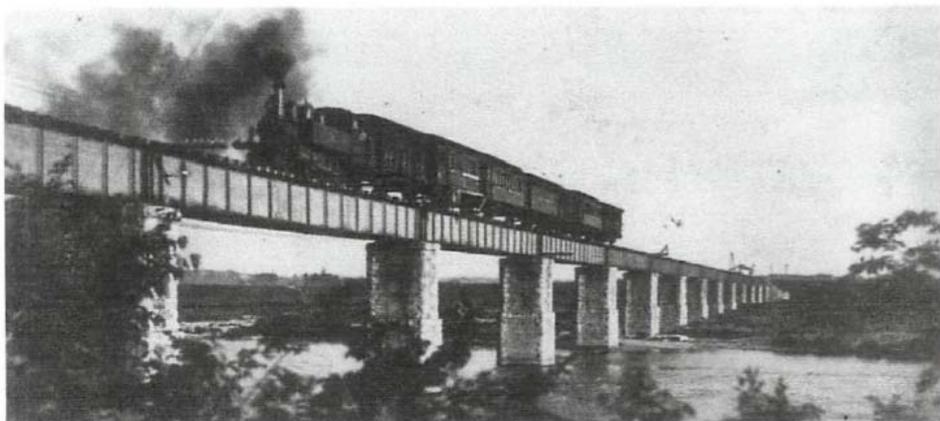
4月1日：播州鉄道 加古川町駅 - 国包駅（初代、現在の厄神駅）間（4.7M≒7.56km）開業。加古川町駅・日岡駅・神野停留場・国包駅が開業。

8月10日：国包駅 - （野村） - 西脇駅間延伸開業。

1916年（大正5年）

10月21日：播鉄中津停留場・釣橋駅が開業。（※加古川大橋上流につり橋ができた）

11月22日：国包駅（初代）が厄神駅に。



国包の鉄橋を渡る蒸気機関車 - (昭和初期) - (畑健夫撮影)

